

状況設定

場所 (但馬の) 城崎温泉 (兵庫) 県
 「自分」の境遇 (山の手線の電車で跳ね飛ばされてけがをした。)

心境の軌跡

★ (生と死) について考える

① 蜂

毎日せわしく働いていた一匹の蜂の死。

← 死者の (静寂)。

② 鼠

← 小川で首に串を刺され、あがき回る鼠。

← 生きるものの (妄執)

← (死ぬに決まった運命) を担いながら、

← (全力を尽くして逃げ回っている) 様子が妙に頭に付いた。

← 自分は寂しい嫌な気持ちになった。あれが本当なのだと思った。

③ いもり

← 驚かすつもりで投げた石が当たって、死んでしまったいもり。

← 生と死を分かつ (偶然性)。

← 自分は偶然に (死ななかった) 。いもりは偶然に (死んだ) 。

← (生) と (死) は両極ではなかった。

← さして (差はない) ような気がした。

● 志賀直哉について (一八八三(明治一六)年~一九七二(昭和四六)年)

宮城県石巻町に生まれる。二歳のころ、東京の祖父母宅へ転居。実業家の祖父の保護のもと、祖母に育てられる。学習院初等科に入学し、キリスト教思想家 (内村鑑三) の影響を受ける。足尾銅山鉞毒事件の見解について (父) と衝突。以後、決定的な不和の原因となる。明治三九年、 (東京帝国) 大学英文学科に入学。 (国文学) 科に転じた後、中退。明治四三年、同級生の (武者小路実篤) ーらとともに (白樺) を創刊。 (網走まで) 『剃刀』 (大津順吉) 『清兵衛と瓢箪』 など次々に発表した。父との不和が原因で、東京を離れ、尾道・松江・京都・千葉県我孫子と転々とした。大正六年、心境小説の領域を開拓した (城の崎にて) 『父との不和を解消していく過程を描いた私小説』 『和解』 を発表し、文壇に確固とした地位を得る。『小僧の神様』を発表後、直哉自身の内面的な発展を主人公 (時任謙作) に託した長編小説 『暗夜行路』 の連載を始め、完成まで十六年を費やした。戦後は小説らしい小説を書くことはなかったが、短編小説の名手として (小説の神様) と終生、慕われた。

